

選択と行為——ハイデガーのアリストテレス解釈

河田 真由子（東北大学）

本発表では、アリストテレスの行為論は従来言われている以上にハイデガーの思想に深く入り込んでいるのではないかという仮定をもとに、ハイデガーの決意性・非決意性を論じたい。ハイデガーは、アリストテレスの選択(prohairesis)を Entschlossensein(GA18:141)すなわち「決意存在」と訳す。この訳語を手掛かりに、Entschlossenheit、決意性とアリストテレス行為論との連関を整理し、さらにその対概念である Unentschlossenheit、非決意性をめぐって、アリストテレスの思想とのつながりをつけたいと考えている。ハイデガーがアリストテレスの「選択」を「決意存在」と訳したのは、『ニコマコス倫理学』ドイツ語の諸訳と見比べても特異であり、何らかの含意はあるだろう。(思案のうえ)他の仕方では選べない、そのようにしか選べないものを行為者は「選び取っている」という意味で、アリストテレスの prohairesis が持っている意味に近い訳語であるといえる。

非本来性のなかへおのれを喪失している現存在が、本来的な自己へと実存的に変容することは、一つの選択を後から取り戻すこととして遂行されねばならない。それは、「選択を選択すること」(Wählen der Wahl, SZ 268)、すなわち固有の自己にもとづいてある存在しうることへと決意することを意味するとハイデガーは論じる。「選択を選択すること」という謎めいた表現であるが、アリストテレスも似た表現を用いている。「選択すべきものを選択する」、すなわちアリストテレスの場合は思慮ある人の選択を意味する。思慮とは「人間の善にかかわる行為をすることの、理りをそなえた魂の真なる状態」すなわち最も善く行為を行うことができる性格であり、アリストテレスは思慮ある人に至高の地位を与える。これは『ニコマコス倫理学』第3巻の行為の概略(選択概念の提示)と第6巻の認知的能力の精緻な分析(行為における思慮ある人の至高性)というアリストテレスのプランに則っている。ハイデガーのアリストテレス研究の熱心さも鑑みて、「選択」と「決意存在」との対比から「思慮ある人の選択」と「決意性」とを類比的につなげる余地があるのではないか。そうすると、決意性はより豊かな内実を持つといえるのではないか。

一方、決意性の対概念である非決意性はどのようなであろうか。ハイデガーは「現存在は世人自己として、公共性の常識的な曖昧さによって『生かされて』いるが、そこでは誰ひとりとして決意しないのに、いつもすでに話が決まっているのである」(SZ 296)と、世間のなかで誰も主体として機能していない状況を非本来性として描く。しかし、このように非本来的なあり方をしていても、現存在は何らかの行為は行っているはずであり、しかし、そこでは何か重要なことが(可能なはずなのに)できていないのである。本発表では、一般的に通りがよいと思われる原・渡辺訳の「非決意性」という訳語を用いているが、この訳あるいは細谷訳の「無覚悟性」は、どちらかというとな記号的な表現である。決意性や覚悟性の対概念であることは一目して理解できるが、実際にどのようなものであるかがみえにくい。

『ニコマコス倫理学』第3巻のアリストテレスの行為の枠組みにおいて、自発的な行為のうち「選択による行為」と「とっさの行為」とが区別される(動物や子どもによる行為を除く)。前者は「思案を伴う欲求」による行為であり、後者はその裏返しで「思案を伴わない欲求」による行為である(とひとまず置く)。思慮ある人の選択と決意性とを類比的にみるならば、とっさの行為と非決意性には通じるものがあるのではないか。この点を検討するとともに非決意性とは何かを考える。

参考文献

Bywater, I., *Aristotelis Ethica Nicomachea*, Oxford, 1894

Heidegger, Martin

SZ: *Sein und Zeit*, 17. Aufl., Max Niemeyer, 1993

GA18: *Grundbegriffe der aristotelischen Philosophie*, Gesamtausgabe Bd. 18, Aufl., Vittorio Klostermann, 2002